

[研究ノート]

カスティーリャ語の pl-, kl-, fl- > ʎ- の変化
についての一考察

—構造主義的考察の有用性とその限界—

菊田和佳子

0. はじめに

ラテン語の語頭子音群 pl-, kl-, fl-¹⁾は、カスティーリャ語（スペイン語）において硬口蓋側面音の ʎ- に変化している（PLŌRĀRE²⁾ > *llorar*, CLĀ-MĀRE > *llamar*, FLAMMA > *llama*）。この変化に関しては、その影響がすべての語に及ばず、変化を受けない語を数多く残している点（PLA-TĒA（> 俗ラ. *PLATTEA）> *plaza*, CLĀRU > *claro*, FLŌRE > *flor*）や同一語源でありながら変化を経た語とそうでない語が共存している（二重語）点（CLĀVE > *llave*「（住居などの）鍵」/ *clave*「（謎を解く）鍵」など）がよく知られている。これまでの研究においては、その関心はなぜ変化を受けない語が存在するのかに主に向けられており、音韻論の観点からこの変化を考察した研究はあまり行われてこなかった。本研究ノートは、

1) 本研究ノートにおいて、ローマン体による表記は一般に音を表し、イタリック体による表記は音以外（主に書かれた形式）を表す。ただし、引用部分や一覧表として語形を列挙している場合は除く。また、原則として [] は音声表記を、/ / は音素表記を表す。しかし、この区別が必要でない場合は、混同の危険性がない限り [] や / / は省略した。音声記号については原則として IPA を用いるが、引用中に用いられたものや特殊なものについてはその限りではない。

2) ラテン語の語形は大文字で表す。なお、本稿では早い段階で消失したとされる語末の -M は表記しない。

この変化を通時音韻論の立場から考察した一連の研究の一部をまとめたものである。

この変化に言及した著名な研究者に Martinet (1974: 388-405) がいる。Martinet は、構造主義的な考察から語頭の *l-* が強い変種で実現される傾向が強いことを示唆し、カスティーリャ語において例外的に語頭の *l-* に弱い変種が定着している要因として *pl-, kl-, fl- > ʎ-* があることを挙げた。Martinet の研究は *pl-, kl-, fl-* の音韻変化そのものを扱ったものではないが、*pl-, kl-, fl- > ʎ-* の変化に語頭の *l-* の変化が関連づけられたことは大変意義深いことであった。本稿は、*pl-, kl-, fl- > ʎ-* の変化に関連する研究の 1 つとして、Martinet の構造主義的な考察を取り上げ、それがこの変化のプロセスを明らかにするうえでどこまで有用であるのかを検証したものである。

1. 母音間 *-l:-* / *-l-* の変化

まずは Martinet (1974) から、本稿に特に関連のある *l:* や *l* に関する変化を取り上げ、詳しく見ていくことにしよう。

俗ラテン語からロマンス諸語が分化する過程で、西ロマニア全域で母音間の子音の体系的な弱化 (*lenición*) が起こったことはよく知られている。ラテン語では母音間において重子音 (長) と単子音 (短) が対立していたが、それがこの弱化によって解消され、ついにはラテン語に存在した重子音は、原則としてその後継となる西ロマニアの諸言語からなくなってしまふ。これが特に顕著にみられるのは母音間閉鎖音で、たとえばカスティーリャ語 (スペイン語) では無声の重子音は単子音に、無声の単子音は有声音に、そして有声の単子音は摩擦音に変化している。

①無声重子音の単子音化 *-p:- > -p-* CAPPĀ > *capa*

②無声閉鎖音の有声化 *-p- > -b-* CŪPA > *cuba* [kúba]

③有声閉鎖音の摩擦音化³⁾ -b- > -β- BIBERE > *bever* [beβér]

似たような重子音解消の傾向は流音 (r, l) や鼻音 (m, n) にも存在した⁴⁾。ただし、これらの場合には無声子音が存在しないため、単純に重子音を単子音にしてしまうと、もともとあった単子音と合流してしまうことになる。しかし、実際にはそうはなっておらず、ラテン語の重子音と単子音の対立は別の形で保存されている (-m:- / -m- を除く)。その実現はどうあれ、母音間の単子音は弱い変種に、そして重子音は強い変種⁵⁾に変わっているのだ。いわば、ラテン語における重子音と単子音の対立は、量 (長短) から質 (強弱) の対立に置き換えられたと言える。この結果をイベリア半島の主な言語で確認してみると以下の通りとなる。

(表1) 母音間重子音と単子音の対立

ラテン語	-r:- / -r- ⁶⁾	-l:- / -l-	-n:- / -n-
カタルーニャ語	-r- / -ɾ-	-ʎ- ⁷⁾ / -l-	-ɲ- / -n
カステイーリャ語	-r- / -ɾ-	-ʎ- / -l-	-ɲ- / -n
ガリシア・ポルトガル語	-r- ⁸⁾ / -ɾ-	-l- / ∅	-n- / ∅

たとえば、ラテン語の -l:- / -l- の対立を例にとってみてみよう。カス

3) -d- や -g- に由来する -ð-, -ɣ- は消失する傾向が強かった。また、ラテン語の -b- に由来する β とは異なり、[w] 由来の β には消失したものもある (RÍVU > カス, río)。

4) 本稿では扱わないが歯擦音にも同様の関係が見られる (-s:- > -s-, -s- > -z- (> -s-))。

5) Martinet (1974: 391, 注 45) では、強い変種と弱い変種の定義に関して、Sommerfelt (1932: 124) の次の記述を引用している。"comparadas con las consonates del grado débil, las consonantes del grado fuerte se caracterizaron por una mayor presión de la lengua..., por un contacto más amplio de los órganos articulatorios..."

6) ラテン語の /r/ は一般に歯茎ふるえ音 [r] で実現されていたされる。

7) アクセントのある i や e が先行する場合には単子音化して -ɻ- になることもある (Moll, 1952: 124)。

8) ただし、現在のポルトガル語ではふるえ音の -r- は口蓋垂ふるえ音 [R] もしくは軟口蓋無声摩擦音 [x] に変化することがある (池上, 1984: 156)。

ティーリャ語やカタルーニャ語では母音間の重子音は $-x-$ に変化し、単子音 $-l-$ との対立を質の対立に変えて維持した。またポルトガル語では母音間の $-l-$ は消失したが、重子音が単子音化して $-l-$ として残ることにより質の違いとして対立が維持されている。同様に $-r:- / -r-$ においても、 $-n:- / -n-$ においても、ラテン語の重子音と単子音の量の対立が別の形で維持されていることが分かる。この説明がうまく当てはまらない部分——たとえば $m:- / m$ はいずれも単子音の $-m-$ になって合流してしまっている (FLAMMA / FŪMU > カス. *llama* / *humo*) ——もあるが、本稿にもっとも関係の深い母音間の $-l:- / -l-$ については、どの言語でも重子音と単子音による量の対立が質の対立に置き換えられて、現在まで維持されているといえる。

2. 語頭の $l-$ の変化

一方、Martinet (1974: 388-405) によれば、質の対立は語頭においても存在したという。ただし、語頭においては重子音が存在しないため、文脈によって強い変種と弱い変種が交替していたと考えられている。つまり、子音で終わる語や休止の後に来る場合には強い変種が現れ、母音の後では弱い変種が現れるようになったのである⁹⁾ (表2)。

9) Martnet (1974: 401) には、これがカスティーリャ語の子音の後の $/r/$ が強い変種 $[r]$ で実現される (IsRael, honRa) のと同じ原理であることが示唆されている。

(表2) 語頭および母音間における強い変種と弱い変種の対立

	語頭		母音間	
	母音の後	子音（休止）の後	単子音	重子音
/r/	-o ra-	-os Ra-	-ora-	-oRa-
/l/	-o la-	-os La-	-ola-	-oLa-
/n/	-o na-	-os Na-	-ona-	-oNa-

(Alarcos (1986) および Martinet (1974) をもとに作成。大文字は強い変種を表す。)

Martinet によれば、やがて類推によって、先行する語が子音で終わるか母音で終わるかに関わらず、語頭には強い変種が現れるようになったという。その結果、(理論上は) 語頭の子音と語内の重子音の結果が一致することになった。たとえば、下記の表3を見ると、カステイーリャ語をはじめとするすべての言語で語頭の r- はふるえ音の r で実現され、母音間の重子音 -r:- に由来する r と一致していることが分かる (ROSA / CARRU > カス. *rosa* / *carro*)。また、カタルーニャ語では語頭の l- は ʎ- に変化し、母音間の -l:- 由来の -ʎ- と一致している (LŪNA / ILLA > カタ. *lluna* / *ella*)。さらにポルトガル語においても語頭の l- が変化せずそのまま残ったことによって、やはり変化せず残った母音間重子音由来の -l- と同じ音になっている (LŪNA / ILLA > ポ. *lua* / *ela*)。

(表3) 語頭単子音と母音間重子音の比較

ラテン語	r- / -r:-	l- / -l:-	n- / -n:-
カタルーニャ語	r- / -r-	ʎ- / -ʎ-	n- / -ɲ-
カステイーリャ語	r- / -r-	l- / -ʎ-	n- / -ɲ-
ガリシア・ポルトガル語	r- / -r-	l- / -l-	n- / -n-

しかし、ここまで述べたことはあくまでも理論上のことであって、実際

にはうまく説明できないこともある（表3の色付きの部分）。たとえば、語頭の *r-* はすべての地域で強い変種 *r-* が一般化した、*l-* に関しては強い変種が定着して、母音間の重子音由来の音と一致しているのはガリシア・ポルトガル語、カタルーニャ語のみであり、カスティーリャ語では弱い変種である *l-* になっている。そして *n-* についてみると、ガリシア・ポルトガル語では *n-* に変化し、重子音由来の *-n-* と同じになったが、カタルーニャ語やカスティーリャ語では、語頭の *n-* は重子音由来の *-j-* と一致していない。

なお、Martinet (1974) では考察の対象に含まれていないが、アラゴン語やアストゥル・レオン語¹⁰⁾では以下のようになっている¹¹⁾。表4、表5を見ると、アストゥル・レオン語の一部¹²⁾で、母音間の重子音の *-n-* と単子音の *-n-* がいずれも *-n-* に変化したため、両者の対立は解消されてしまっているが、語頭の *n-* も *n-* になっているため、結果的に語頭の *n-* と母音間重子音由来の *-n-* は一致している点は興味深い。つまり、その地域では母音間の単子音、重子音、語頭子音が同一になっているということである。一方、アラゴン語では語頭の *l-*、*n-* がいずれも弱い変種に変わっていることが分かる。

（表4）母音間重子音と単子音の対立

ラテン語	<i>-r-</i> / <i>-r-</i>	<i>-l-</i> / <i>-l-</i>	<i>-n-</i> / <i>-n-</i>		
アラゴン語	<i>-r-</i> / <i>-r-</i>	<i>-ʎ-</i> (tʃ, t) / <i>-l-</i>	<i>-j-</i> / <i>-n-</i>		
アストゥル・レオン語	<i>-r-</i> / <i>-r-</i>	a) <i>-ʎ-</i> / <i>-l-</i>	b) <i>-tʃ-</i> / <i>-l-</i>	a) <i>-j-</i> / <i>-n-</i>	b) <i>-n-</i> / <i>-n-</i>

10) アストゥル・レオン語は方言分化が大きいため、表4、5では代表的な結果のみを挙げてある。語頭の *l-* の変化について詳しくは3. に付した参考資料を参照されたい。

11) Catalán D. y Menéndez Pidal (1957), García Airas (2003) および Conte et al. (1977) をもとに作成。

12) 具体的には北東部を除くアストゥリアス西部方言、アストゥリアス中央部の南部方言などに当たる。

(表5) 語頭単子音と母音間重子音の比較

ラテン語	r- / -r-	l- / -l-	n- / -n-
アラゴン語	r- / -r-	ʎ- / -ʎ- (tʃ, t)	n- / -ɲ-
アストゥル・レオン語	r- / -r-	a) ʎ- / -ʎ- b) tʃ- / -tʃ-	a) ɲ- / -ɲ- b) n- / -n-

3. 語頭の l- と pl-, kl-, fl-

この節では特に本稿に関係のある語頭の l- の例外について見ていこう。Martinet (1974) は、カステイーリャ語において語頭の l- に弱い変種が現れる理由を pl-, kl-, fl- の変化との合流を避けるためであると説明した。すなわちカステイーリャ語では pl-, kl-, fl- が ʎ- に変化したため、語頭の l- が口蓋化してしまうと多くの同音異義語が生じてしまうことになる (LANA / PLANA > カス. *lana* / *llana*, LAMA / FLAMMA > カス. *lama* / *llama* etc.)。それを避けるためにカステイーリャ語の話者は弱い変種の方を選択したと考えたのである。一方、カタルーニャ語では pl-, kl-, fl- がそのまま残っているため、l- が口蓋化しても合流は起こらない。またレオン語の一部では tʃ- に変わっているため、l- が ʎ- に変化することができたという¹³⁾ (表8の西部方言 (レオン) を参照のこと)。Martinet が意図していたのは、なぜ語頭において l- > ʎ- の変化が生じなかったのかという点であり、なぜ pl-, kl-, fl- が ʎ- になったかではない。しかし、pl-, kl-, fl- の変化のプロセスを明らかにするには、語頭の l- の変化も考慮に入れる必要があることが示唆されていることは意義深い。

13) 後に述べるように、実際には pl-, kl-, fl- が tʃ- に変化しているのはアストゥル・レオン語の中でも西部の変種のみである。

[参考資料] 語頭の l- と pl-, kl-, fl- の分布

(表6) カスティーリャ語よりも東に位置する言語

ラテン語	l-	pl-, kl-, fl-
カタルーニャ語	ʎ-	pl-, kl-, fl-
cf. リバゴルサ q の変種	ʎ-	pʎ-, kʎ-, fʎ-
アラゴン語	l-	pl-, kl-, fl-

(表7) カスティーリャ語

カスティーリャ語	l-	ʎ-
----------	----	----

(表8) カスティーリャ語よりも西に位置する言語①

アストゥル・レオン語

東部方言	ʎ-	ʎ-
中部方言 (アストゥリアス) ¹⁴⁾	ʎ-	ʎ-
(レオン)	ʎ-	ʎ-
西部方言 (アストゥリアス A)	ʎ-	ʎ-
(アストゥリアス B)	tʂ-	tʂ-
(アストゥリアス C)	tʂ-	tʃ- (あるいは tʂ-)
(アストゥリアス D)	tʂ-	tʃ- (あるいは tʂ-)
(レオン)	ʎ-	tʃ-

(A～D はそれぞれアストゥリアス西部方言の A. 北東部、B. 南東部、C. 北西部、D. 南西部を表す¹⁵⁾。)

14) ただし、アストゥリアス中部方言のうち、南側に位置する変種では、L- > tʂ-, PL- etc. > j-となる。

15) Catalán, D y Menéndez Pidal (1957) による分類。

(表 9) カスティーリャ語よりも西に位置する言語②

ガリシア語	l-	tʃ-
ポルトガル語	l-	ʃ-

4. 言語地理学からの示唆

現代のイベリア半島の諸言語における結果を共時的な観点から見ると、語頭の l- の口蓋化はカスティーリャ語の東側と西側のカタルーニャ語およびアストゥル・レオン語のみに見られる現象である（3. に付した〔参考資料〕を参照されたい）。しかし、通時的に見ると、かつてはその範囲がもっと広がった可能性が示唆される。本章では Menéndez Pidal (1960) および Lapesa (1988)、その他の資料に基づいて地域ごとの状況を観察してみる。

カタルーニャ語では 9 世紀には最古の例が見られるという。その後も間接的に口蓋化を示唆する例は見られるが、はっきりと口蓋化を示す例が現れるのは 13 世紀である。Menéndez Pidal によれば、語頭の l- の口蓋化は非常に粗野な発音と考えられていたようである。そのため、表記には残りにくく、口蓋化の例が優勢になるのは、カタルーニャ語の文章語が大きく衰退する 16 世紀になってからのことである。Meyer-Lübke (1890: 364) は、1353 年にアラゴン王国に征服されたサルジニアの Alghero のカタルーニャ語でもこの l- の口蓋化が見られることを指摘している。これは、この現象が 1353 年以前に広がっていたことを示す傍証となるだろう¹⁶⁾。

アラゴン語ではカタルーニャ語との境界付近にあるリバゴルサやソブラ

16) ただし、Meyer-Lübke (1890: 364) は、カタルーニャ語の口蓋化はアストゥル・レオン語の口蓋化とは別に発展したのだと考えている。

ルベの変種では現在でも口蓋化が見られる。他の地域では今日ではほとんど *l*- になっているが、歴史的にははるかに広い範囲で *ɫ*- が存在していたとされる。たとえば、Lapesa (1988: 178) によれば 11-14 世紀の資料にアラゴン地域で口蓋化が起っていたことを示す例が見つかるという (*llicència, llogares, lluego* etc.)。Menéndez Pidal によれば、この地域でも *l*- の口蓋化は教養のない人の発音とされていたため、例がほとんど見られない時期もあるが、資料によっては口蓋化を表す *ll*- の表記が頻繁に用いられているものもあるという。また 14 世紀の資料 *Poema de Yûçuf* でも *llopo* や *lluego* など、口蓋化を示す例が多くみられる。Menéndez Pidal は、現在わずかな地域に残っている *l* > *ɫ*- の現象や、12 世紀から散発的に見られるこのような例は、*l*- の口蓋化がアラゴン語では一般的な現象であったことを示す十分な証拠となると考えている¹⁷⁾。

中世のかつてのレオン王国の資料には、語頭の *l*- の口蓋化が豊富に記録されているという。それは 10 世紀の公証人による文書に始まるが、13-14 世紀には *llavor, llabrar, llogares, llobo* などの例が豊富に見られるという。すでに見た通り、その実現は様々であるが、*l*- の口蓋化は現在でもアストゥル・レオン語の多くの地域で観察される。

Menéndez Pidal の調査によれば、旧カスティーリヤのサンタンデル (現在はカンタブリア自治州) の西部では、地域によって *l*- が口蓋化していたという (*llubina, llaguna*, etc.)。一方、ブルゴスやその他の旧カスティーリヤ地域では基本的には *l*- を口蓋化する方言はない。しかし、地名などにおいては、カスティーリヤの北部でも口蓋化を示すものが存在している (*Lloréngoz, San Llorente de Losa, Llaguno*, etc.)。この事実はかつて

17) Menéndez Pidal がアラゴン北部の全域に広がっていたと考えていることに対し、Conte et al. (1977: 56) はその地域で口蓋化が一般化していたと確信をもって言えるほど十分な例はないとしている。

この地域にも口蓋化が広がっており、後にそれが（地名には残る一方で）消失したことを示していると考えられる。

また、本稿では考察の対象ではないが、トレドやマドリード周辺、また半島南部のアンダルシアでかつて話されていたモサラベ語には ʎ- の口蓋化があったことはよく知られている（*yengua*, *llançās* ‘lanzas’）。

通時的に見てみると、かつてはイベリア半島のかなり広い地域で語頭の ʎ- > ʎ- が起きていたことが分かる。つまり、通時的に見てみれば語頭に強い変種が来るという Martinet の仮説はかなりの程度まで実証できると言える。Menéndez Pidal によれば、現在では ʎ- > ʎ- の地域を東西に二分するように語頭の ʎ- を持つ地域が広がっているのは、ブルゴスを中心とするカスティーリャ伯領で ʎ- を好む新しい傾向が生まれたからだと考えられるという。言語地理学的な観点から観察すると、新しい傾向がカスティーリャの拡大と共に広がっていき、周辺に古い傾向が残ったということが分かる。

5. 構造主義の限界

Martinet (1974: 388-405) による構造主義的な考察は、カスティーリャ語の語頭の ʎ- および pl-, kl-, fl- の変化に関して明快な説明を与えてくれる。しかし、すでに述べたように実際には構造主義的考察によってすべてがうまく説明できる訳ではない。

5.1

問題点として挙げられる点の 1 つ目は、Martinet 自身も認めているように、いくつかの言語で語頭に弱い変種がきており、母音間の重子音由来の音と一致していない点である。カスティーリャ語で語頭の ʎ- が弱い変種

に変わった理由については、pl-, kl-, fl- との同音衝突の回避を提起することによって説明できる。しかし、同じ考え方ではカタルーニャ語、カスティーリャ語、またアラゴン語でも n- > ɲ- とならなかった理由については説明がつかないのである。

Alarcos (1986: 247-251) はこの点を考慮したのか、Martinet とはやや異なるプロセスを考えている。Martinet は語頭においては類推によって強い変種が一般化したと考えたが、Alarcos は場合によって強い変種が一般化することもあれば、弱い変種が一般化することもあったとし、先行する要素が何かに関わらず強い変種が一般化した例としてレオン語やカタルーニャ語の l- (> ʎ- etc.) の変化を挙げ、一方、弱い変種が一般化した例としてカスティーリャ語で l- が維持されていることやイベリア半島のほぼすべての言語で n- が維持されていることを挙げている。つまり、言語によってもどちらの変種を採用するかが異なるし、また音によってもどちらの変種に変わるかが異なるということを認めているのである。Alarcos は、文脈に関わらずいずれか 1 つの変種が選ばれるようになったのは、1) 母音間で強い変種と弱い変種が 1 つの音素の異音になったこと、2) 先行する子音もしくは母音の消失のために、文脈には無関係に語頭に現れる変種が決まるようになったことが関係していると考えたのである。

大きな枠組みで考えれば、構造主義的な考察によってうまく説明できる点は少なくない。しかし、地域によってその歴史も基層となる言語も異なる以上、各論になれば何らかの不均衡が現れてくるのは当然のことである。構造主義的な考え方ですべてが整然と説明できればそれに越したことはないが、細かい点については、限界を認め、言語の歴史や事情によって柔軟に対応せざるを得ないだろう。Alarcos の主張は、この事象に関して構造主義が説明できない部分にうまく折り合いをつけようとしたものと言える。

Alarcos のように語頭に弱い変種が来る場合もあることを認めれば、次

にこの現象に関する重要な課題となるのは、では言語によってあるいは音によって、なぜ弱い変種が選ばれたり、強い変種が選ばれたりするのか、その違いが生まれる理由を言語ごとあるいは音ごとに個別に解明していくことである。その点では、カステイーリャ語では語頭の l- に弱い変種が一般化した経緯に pl-, kl-, fl- の変化が関係している可能性を Martinet が提起したことは非常に意義深いと言える。

5.2

問題点は他にもある。Martinet (1974: 402) は、語頭の l- が強い変種をとるか、弱い変種をとるかに pl-, kl-, fl- の変化が関係している根拠として、カステイーリャ語やカタルーニャ語のほかにレオン語においても語頭の l- (> ɸ-) と pl-, kl-, fl- (> tʃ-) 由来の音との弁別が保たれている点を挙げている。しかし、pl-, kl-, fl- の結果が tʃ- になるのはアストゥル・レオン語西部の一部の方言でのみで見られることであり、ほとんどの地域では pl-, kl-, fl- (> ɸ- または tʃ-) と l- (> ɸ- または tʃ-) の結果が合流している (LAMA / FLAMMA > アス. *llama*, *llama*)。 (各言語における l- と pl-, kl-, fl- の分布は 3. に付した参考資料を参照されたい。)

語頭の l- は pl-, k-, fl- との合流を避けるように変化すると仮定すれば、これは不都合な事実と感じられるだろう。しかし、Martinet がもともと意図していたのは pl-, kl-, fl- の変化を説明することではなく、構造主義的な観点から各言語の単子音化のプロセスを見ることであった。カステイーリャ語で語頭に強い変種が来ているという矛盾を説明するために pl-, kl-, fl- の変化を持ち出さなければ、アストゥル・レオン語で語頭の l- が強い変種に変わり、母音間の重子音と同じ結果になっているということ自体は、構造主義的な視点から見て特に問題はない。カステイーリャ語では pl-, kl-, fl- が強い変種と同じ ɸ- をとり、語頭の l- が弱い変種をとって対立が維持

されたが、アストゥル・レオン語ではたまたまどちらも強い変種をとったということになるだろう。このことは、少なくともアストゥル・レオン語においては、語頭の *l-* と *pl-, kl-, fl-* の結果との同音衝突を回避することが変化の要因とはなかったということを示唆している。すなわち、言語によっては、*l-* が *pl-, kl-, fl-* と合流してしまうことになっても、それ以外の歴史的あるいは言語上の事情が優先される場合もあるということであろう。

もちろん、だからといって、カスティーリャ語に関する Martinet の説明がまったく成り立たないということではない。Alarcos (1986:251) も *l-* と *pl-, kl-, fl-* の結果が合流する地域があったとしても、すべての地域で同音衝突を避けようという意図が重要でなかったという訳ではないと述べている¹⁸⁾。同音衝突は言語変化にとって重要な要因であることは間違いなが、優先すべき点や変化の方向性は言語によって異なるという点も忘れてはいけない。Martinet もバスク語の言語基層による “*influencia perturbadora* (p. 404)” の存在などを示唆している。構造主義的な考え方は言語変化について多くの有益なヒントをくれるが、大きな変化を考える際には複数の要因に目を向けることが必要であると言えるだろう。

5.3

最後の問題点は、アラゴン語では、*pl-, kl-, fl-* は基本的にそのまま維持されており、*l-* 由来の音と合流してしまう可能性はないのにも関わらずアラゴン語では語頭の *l-* が *ɰ-* に変化していないという点である。*l-* が口蓋化していない理由として、カスティーリャ語では *pl-, kl-, fl-* との合流を回避

18) Sin embargo, el hecho de que dos realizaciones confluyan en unas zonas (perdiéndose distinciones), no implica que en todas partes se desatienda la intención diferencial; aunque en leonés confluyeron los resultados de /pl, kl, fl/ con el de /l/ inicial (generalizándose la variante fuerte de ésta), no hay motivo para creer imposible que en el castellano se evitara esa confluencia mediante la generalización de la variante débil de /l/ inicial [1]. (Alarcos, 1986: 251)

するためだとする説明が可能だが、アラゴン語ではそれが成り立たないのである。

この点も pl, kl, fl > ʎ- と l > ʎ- の変化の関連性を考えるうえでは不都合な事実ということになるだろう。しかし、4. で見た通り、かつてはアラゴン地域を含む、広い地域で語頭の l > ʎ- の変化が起きていたことを示唆する資料が豊富にある。つまり、古い時代にはアラゴン語でも語頭の l が ʎ- になっており、母音間重子音の -ʎ- と一致していたと考えられる。おそらく語頭ではそれによって pl, kl, fl- との合流が避けられていた可能性が高い。これは現在のカタルーニャ語の分布と同じである。現在アラゴン語で語頭の l が l のままであるように見えるのは、後に語頭の l 由来の ʎ- が何らかの理由で l に交替し、現在のような分布になったためだと考えられる。カスティーリャ語の場合には pl, kl, fl > ʎ- との合流を避けるように ʎ- → l の交替が生じていると言えるが、アラゴン語の場合には pl, kl, fl > ʎ- の変化が進まなかったため合流の可能性が生じなかったにも関わらず、やはり語頭の ʎ- → l の交替が生じている点は興味深い。いずれにしても、この第3の問題点については、通時的な観点からの資料を追加することでうまく説明がつくことが分かる。

6. まとめ

当然ながら限界はあるにせよ、流音や鼻音に関する構造主義的な考察は言語変化の要因を解明するうえで非常に有効である。また、カスティーリャ語の歴史を考えるうえで、イベリア半島の他の言語との体系の違いを観察することで分かることは少なくない。語頭の l と母音間重子音 -l- の分布については、イベリア半島の多くの言語で構造主義的な説明がうまく当てはまることが分かった。またこの研究のテーマである pl, kl, fl- の変

化についても、構造主義的な考察によりカスティーリャ語では語頭の l- の変化が深く関係していることが示唆された。これは現在の pl-, kl-, fl- と l- の地理的な分布を比べることによっても理解できる。カスティーリャ語において pl-, kl-, fl- > l- の変化があったから語頭の l- > l- の変化が妨げられたのか、語頭の l- > l- の変化があったから pl-, kl-, fl- > l- の変化が起こったのかについては検証の余地があるが、pl-, kl-, fl- の変化を考察する際には、この結果を踏まえ、語頭の l- の変化の結果や時代背景に注意することが非常に重要である。

一方、構造主義的な考察には現時点では解決できない問題を含んでいることは確かである。言語の構造上の不均衡が言語変化の要因になることは間違いがないが、言語変化の要因を明らかにするためにはそれだけに頼ることはできないということであろう。均衡のとれた構造に向かうのが言語変化の唯一の性質であるとすれば、多くの言語が同じような方向に進むことになってしまう。ラテン語からロマンス諸語が生まれたように、地域によって言語の変化の方向が微妙に異なり、やがて明らかに違う特徴を持った2つの言語に分岐するのには、その地域ごとの歴史的、社会的な事情も大きく関係していると考えられる。言語内の要因で説明できない点については、その地域の言語基層や人口の移動、教育事情、為政者による書記言語の保護などの社会的要因も考え合わせる必要があるだろう。

引用文献

- Alarcos Llorach, Emilio. 1986. *Fonología española*⁴. Madrid: Gredos.
- Catalán, Diego; Menéndez Pidal, R. 1957. "El Asturiano Occidental. Examen sincrónico y explicación diacrónica de sus fronteras fonológicas". *Romance Philology*, 11, p. 120-157. Berkeley: University of California Press.
- Conte Cazcarro, Anchel et al. 1977. *El aragonés: identidad y problemática de una lengua*. Zaragoza: Librería General.

- García Arias, Xosé Lluis. 2003. *Gramática histórica de la lengua asturiana: fonética, fonología e introducción a la morfosintaxis histórica*, 2ª edición igualada y allargada. Asturias: Academia de la Llingua Asturiana.
- 池上 峯夫, 1984, 『ポルトガル語とガリシア語』, 東京: 大学書林.
- Lapesa, Rafael. 1988. *Historia de la lengua española*⁹. Madrid: Gredos.
- Martinet, André. 1974. *Economía de los cambios fonéticos*, versión española de Alfredo de la Fuente Arranz. Madrid, Gredos.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1960. “4.- Evolución de LL, NN y RR geminadas. Extensión geográfica del refuerzo.”, “5.- Cómo explicar el origen del refuerzo de LL, NN, RR”, M. Alvar et al. (dir). *Enciclopedia Lingüística hispánica*, I, p.87–138. Madrid: CSIC.
- Meyer-Lübke, W. 1974. *Grammaire des langues romanes, I. Phonétique*, Traduite par Eugène Rabet. Genève: Slatkine Reprints / Marseille: Laffitte Reprints.
- Moll, Francisco de B. 1952. *Gramática histórica catalana*. Madrid: Gredos.